

前近代中国の天文学には、天文学科学〈astronomy〉と天文占学〈astrology〉という二つの側面があったことはよく知られている。例えば、古来より中国では、天体観測により暦を作成することを統治者の務めとする一方で、彗星や日蝕など様々な天文の異常現象を読み解くことで国家の行く末を占った。一方、「天変地異」というように、天上の異変のみならず、地上の異変についても統治者は注意する必要があった。なぜなら、地上の異変もまた天上の異変と同様、国家の未来を示すものであったからである。そのため、地震や洪水、日照りなどの災害に加え、奇妙な動植物、人や動物の異常行動、怪異現象などもまた国家により記録され、占いのために用いられた。これを「災異思想」と言い、漢代以降、儒教の国教化と共に、国家理念として継承されていった。

本報告では、こうした中国の伝統的な世界観を、天文五行占書・天文類書などと呼ばれる文献群から、読み解いてみたい。